

立ち止まっている子どもに寄り添って 自立に向かうために保護者の対応や援助

さいたま教育文化研究所教育相談室長 柳田 智

一人で悩んでいませんか

「一人で悩んでいませんか」というのが私たちの呼びかけです。また「立ち止まっている子どもに寄り添って」というのが私たちの姿勢です。相談の多くは親御さんから寄せられます。内容は、学齢期のお子さんの不登校、登校拒否、いじめ、また、学齢期を過ぎた青年の「社会的引きこもり」、「発達障害」等です。電話・来室、年間300件程度の相談が寄せられます。埼玉県庁地下で月、水、金、10時～16時まで、開所しています。どの相談内容も大変に深刻なものです。その一例を紹介します。

* * *

昨年の五月中頃、涙ながらの嬉しい電話

をいただきました。「先生、母の日にカーネーションの花束が届きました。」お子さんは一人っ子。高校受験で躓いて、そこから15年間思い通りに先に進めず、外に出られませんでした。中学までは成績もよく、野球少年で、順風満帆でした。ところが、3年次、部活でのトラブルでいじめに会い、その時「親が何もしてくれなかった」というのが繰り返し戻っていく「彼の言い分」です。

特に、それまで応援していた父は熱が冷めたように彼から気持ち離れてゆき、夫婦間も不仲になり、相談室につながったのは2014年。お母さまは憔悴しきっておられました。家族の時計が、彼が高校に行けなかったあの時に止まってしまったかのようでした。

子どもの気持ちがわからない

彼は高校に進めませんでした。高校卒業資格認定を受け、予備校に通い、大学受験を目指しました。毎年時期が来ると入試要項を取り寄せるのですが、心と身体の準備が整わず受験を見送り、その都度心身ともにひどく落ち込んで、激しく咳き込み、荒れて、お母さまに乱暴な口をききます。時には暴力も振るいました。彼はいつも、今の生き方とはもう一つ別の生き方が、パラルルに存在しているかのように思っています。そうならなかったのは「あの時お前たちが何もしてくれなかったからだ。」と母を責め、詰ります。その繰り返し10年続いたと言っているようです。

お母さまは本当に苦しく、おどおどしながら毎日を過ごしておられたようです。「子

どもの気持ちが変わらない」「どう応えていいかわからない」「何をしてやったらいいかわからない」お母さまの悲鳴のようなお言葉です。

私はこのやり取りの中から彼の心を読み解くいくつかのヒントをいただきました。①明りの見えない真つ暗闇の中になつた一人を取り残されていること。②思い描いている「パラレルワールド」は、彼の「希望」であること③不安や不満のはけ口としてお母さまに話すことで心を落ち着けていること④前向きな努力(試み)を続けていたこと。

信じて、任せて、待つ

お母さまの対応についていくつかアドバイスをしました。①まず「聞く力」ということ。苦しいでしょうが、お子さんの言うことを、ボクシングのサンドバックのように受け止めてください。それは一時だけで、すぐに通り過ぎていきます。子どもの言うことを、冷静に共感しながら、鏡のようにそのままオウム返しに返してやってください。子どもは自分の言っていることを自分で整理していきます。「売り言葉に買い言葉」は絶対に避けてください。②次に「信じる」こと。子どもは必ず成長する力を持つてい

る。また、その過程で無駄なことは一つもない。子どもの「試行錯誤」に「任せる」こと。そして親とは別の人格として必ず自立していくものです。それを「待つ」ことです。この「信じて、任せて、待つ」ことが二番目のアドバイスでした。③三番目には「子どもの課題、親の課題」ということ。(次項で詳述)

このお子さんは2014年以後、少しずつ動き出しました。相変わらず不満を持ち、親に毒づきながらも、自分で決めて建築系の専門学校に入学しました。途中「止める」「向いてない」「大学に編入したい」などと何度も言い、学校の授業や指導に何度も文句を言いました。その都度私が大事にしたのは前述の「聞く力」です。

子どもの課題、親の課題

せっかく入った専門学校に「向いてない、止める、大学を受けなおしたい」と言いだした時、親はオロオロしてしまいます。「今までのお金が無駄になってしまふ」とか「せめて専門でもちゃんと卒業してよ」とか「そうね、大学の方がいいかもね」などと言いかねません。また、今通っている学校に対して文句を言った時「じゃあお母さんが学

校に言つてあげようか」とついおせっかいを焼きたくなります。私はその度にお母さんに聞きました。「もしあなたがそういう対応をしたとして、その先あなたは何かできるのですか」「最後まであなたが面倒見切れるのですか」：答えは「NO」です。大事なことは、「自立」は子どもの課題であつて、親の課題ではないということです。子どもが自分で生きていく力を持っているということをお母さんが一点の曇りなく信じれば、子どもは動き出すのです。動き出したら親はもう何もしなくていいのです。おせっかいや、先回りは子どもの自立を妨げます。「心配」は実は親が自分の心を配つて、自分を安心させたいだけです。親にできることは、「サンドバック」になって、子どもの声を聴き、心に寄り添い続けることだけです。子どもが自分で自分の考えを整理していくのを写しだしてやる「鏡」になればいいのです。それが親の課題です。

自立を応援すること

自立というのはなんでも一人でやるということではありません。依存先を親から周りの人たちに上手に分散して付け替えていくことです。学校の授業に不満があつたら、

友達や学校の先生に相談する。就職については学校に相談すれば面倒見てくれるのです。そういうものをうまく使えるような知恵を徐々に身につけていくことが「自立」の一步です。

やがて彼は就職・卒業の時期を迎え、一波乱二波乱ありました。その度にお母さまはオロオロしてしまいました。私はこんなオーラを出し続けたらいかがでしょう、と提案しました。「お前がどう決めても、文句はいわないよ、なぜならそれはお前の人生だから。例えばそれが、お母さんの希望と違っても、絶対お前を見捨てないよ。100%お前を応援するよ」どうかこのことを心から伝え続けてくださいとお願いました。彼は学校が推薦してくれた就職先（大手の建設会社、内定まで取りつけました）をドタキャンしてしまいました。また、卒業制作が間に合わないことも重なり、パニックになり、「俺はもう卒業できない」と荒れましました。母親は「卒業させてくれないのではないか」と動揺し、学校や相手企業に謝罪して元に復すべきだと考えました。

カーネーションの花束

学校推薦の内定をドタキャンしてそのま

まにしておくのは、確かに社会常識に反することかもしれない。しかし私は、本人がそのことをどう考えているかを聞きましました。本人はその会社がネットで「ブラック企業」として書き込みが多いことから躊躇していること。別の会社を自力で見つけて、今そこに行く気持ちで動いている由を伺いました。私の経験上、学校がここまで来て卒業させないことはありえません。学校や相手会社の善意をいわば踏みに行うことになっても、本人が飛び立っていかうとしていることこそ大切なことだから、親は余計なことはしないほうがいい、もし本人が、一般社会常識に反することをしと思うならやがて必ず気づくはずだ、と申し上げました。彼が自分の力で情報を集めて、自分の頭で考えて、自分の判断で決めようとしていることをお母様は何もせず、信じて待つことができました。

最終的には無事卒業し、自分で見つけた小さな工務店、しかも自宅から遠く離れた所に就職し、自分で荷物をつくり、自分の車で旅立っていきました。そしてこの冒頭のお話。5月にカーネーションの花束が届きました、そこには「お母さんありがとう」と自筆のメッセージカードが添えられていたのです。ここまでが第一幕。

* * *

「その後何事もなく……」と言いたところですが、半年で辞めました。「辞めさせられ」たといった方が適切です。就職したのは震災関連の建築会社で、補助金の関係で次々と雇っては辞めさせる質の良くない企業だったようです。

その後もう一社「アルバイト」で就職し、はじめに「現場監督」を勤めました。これも「辞めさせられ」ました。労基署等に相談し、残業代の支払いや身分保全を訴えることを勧めましたが、一歩が踏み出せませんでした。特に二件目は、「固定残業」という働かされ方を強いられ、また、「半年たったら正式採用する」という口約束を反故にされたことが、二重に打撃でした。意欲ある若者を「育てる」観点を全く持たない「働かせ方」が横行しているのに憤りを覚えます。それでも本人は今、次の挑戦を始めています。本人が「働きたい」と思っていることを大切に、親御さんも今、第二幕に入っています。